『環境変動下における先住民の文化芸術・継承活動とその変遷』（2020）pp.5-27

ウラーンムチル芸術歌舞団の草創期における上演作品
―中国内モンゴル自治区赤峰市オンニュート旗の事例から―

T・アルタンバガナ

1. はじめに

本稿の目的はウラーンムチル[1]芸術歌舞団（以下ウラーンムチル）の草創期の上演作品の詳細な検討から中国が社会主義思想の宣伝と民族文化の普及をどのように実践していたのかを明らかにすることである。

ウラーンムチル（*Ulaɤan möčir*）とはモンゴル語で、ウラーンは赤い、ムチルは枝[2]で、ウラーンムチルで「赤い枝」[3]を意味する。赤色はモンゴル語で革命を象徴する。漢語では「紅色文化工作隊」という。紅色は革命を象徴し、文化工作隊は文化の活動を行う団体を指す。もしくは「烏蘭牧騎（*wu lan mu qi*）」と表記する。烏蘭はウラーンの音訳であるのに対して、牧騎は「ムチル」の音を表すと同時に、「牧畜民」と「騎馬」の意味も含む。馬に乗って社会主義を実践する牧畜民というのが「烏蘭牧騎」の字義になろう。またウラーンムチルは馬や馬車、或いは徒歩で、少人数で行動する性質から「社会主義文芸軽騎兵」とも呼ばれている（シンジルト 2010：185）。

ウラーンムチルは、1950 年代に内モンゴルで誕生したアマチュア文芸団体であった（シンジルト 2010：185）。その字義どおり、ウラーンムチルとはダンスや歌、歌劇などの文芸活動を通して、主にモンゴル地域の牧畜民や農民に対して社会主義思想の普及を目指したものだった（内蒙古自治区文化庁編 1997）。ウラーンムチルは、1964 年から全国巡回や全国少数民族アマチュア文芸コンクールを経て、国家首脳の毛澤東や周恩来らと接近し、中国の『人民日報』と『北京日報』など新聞にウラーンムチルに関する紹介記事、文芸評論が掲載された。その結果、ウラーンムチルは、説明されるべき固有名詞ではなくなり、一般的で誰もが知っている普通名詞として使用され始めたという（シンジルト 2010：195-201）。

ウラーンムチルの研究はその政治性に着目したもの（シンジルト2010；T・アルタン2017：111）や文化パフォーマンスとしての社会的な役割（T・アルタン2019：2）や内モンゴル自治区（以下、内モンゴル）東部地域を事例に1990年以降の活動状況を論じたものがある（紅

1　モンゴルの「ウラーン」（赤い）は、人によっては「オラーン」、「ウラーン」などと表記されることもある。先行研究では、ウラーンムチルを「オラーンムチル」や「ウランムチ」と表記している。ウランムチは中国語の音読みである。本稿ではオラーンムチルや、ウランムチに対してウラーンムチルを使うようにした。ただし、先行研究を引用する場合は原文通り「オラーンムチル」や「ウランムチ」と表記し、オリジナルの意味を保持することにした。また、「赤い」と「紅い」については、日本語訳と借用語として使うときは「赤い」を使い、オリジナルの漢字を使う場合は「紅」を用いる。

2　ムチルについて漢語訳では新芽と表記されてきた（内蒙古自治区文化庁編 1997：80）。しかし、これは誤訳である。

3　これは毛澤東の『文芸講話』（1942）にもとづく。毛澤東はこの講話において、中国のプロレタリア革命事業を「大樹」と例え、文芸・文化工作はその中の一つの「小枝葉」であるとした（内蒙古自治区文化庁編 1997：80）。

2013）。これまで内モンゴルにおけるウラーンムチルの役割は中国の国民統合や内モンゴルを宣伝するための道具と言われてきた（シンジルト2010）。さらに、ウラーンムチルはその発展形態から内モンゴル文工団[4]と比較して「専門性、制度性、権威制」はなく、「大衆性」を特徴とするとされる（シンジルト2010）。つまり、その活動の対象が牧畜民、農民、労働者、兵士（軍人）、教職員や学生などであったことをいう。それゆえに、ウラーンムチルは特にその草創期において社会主義思想を宣伝するという役割を持つとともに、民族文化を普及することを役割としていたとされる（紅2013：157）。ここでいう民族文化とは遊牧文化である（紅2013）。草創期とは1957年の創立から文化大革命が始まる直前の1965年までを指す（紅2013）。ウラーンムチルの上演プログラムを検討した紅（2013）によれば、草創期の特徴は「党、社会主義思想を反映した作品を上演する同時に遊牧民の好む文化芸術を上演していた。しかし、1965年になると毛澤東文芸路線革命思想の宣伝を中心に行う傾向になる」とされる（紅2013：162）。だが、これは個別にその内容を検討したものではない。本稿は資料にもとづきウラーンムチル草創期における上演作品を詳細に分析する。これらの作品は草創期にだけ上演されたものではない。現在においても上演されている作品が数多い。本稿にて事例としてとりあげるのは、後述するようにウラーンムチル草創期に関する資料が豊富にある赤峰市オンニュート旗ウラーンムチルである。内モンゴルで最も早い1957年にウラーンムチルが成立した地域は2つある。一つは、シリンゴル盟スニド右旗であり、牧畜地域である。もう一つはオンニュート旗であり、しかも半農半牧地域である。ウラーンムチルが半農半牧畜地域で成立したことは牧畜民にとって珍しい経験だったという（内蒙古自治区文化庁編1997：83）。

まず、本稿が依拠する資料および実地調査について述べる。次に、オンニュート旗の概要とウラーンムチル創立当時の概要を明らかにする。そのうえで、草創期の上演作品を詳細に検討する。最後に、草創期における上演作品がどのような内容で、そこにはどのような目的があったのかを考察する。

2. 資料および実地調査について

近年、中国においてウラーンムチルの歴史資料（内蒙古自治区文化庁編 1997；鳥編 2002；達・朱編 2007；劉・張編 2012；達・朱・洪編 2017 など）やウラーンムチル隊員[5]に関する回想録などが出版されるようになってきている（朱・吉編 2018；王・刑編 2018 など）。

本研究はこれらの資料に依拠しているが、なかでも本稿が大きく依拠したのは『オンニュート旗ウラーンムチル誌（翁牛特旗鳥蘭牧騎志）』（2012 年）である。本誌はオンニュー

[4] 内モンゴル文工団は、1946 年 4 月 1 日に張家口で創立している。1953 年に内モンゴル歌舞劇団に改名し、1956 年に内モンゴル歌舞団に改名した（シンジルト 2010：190）。

[5] 本稿では、歌舞団の成員を団員とし、ウラーンムチルの成員を隊員とする。ウラーンムチルは中国語で「紅色文化工作隊（宣伝隊）」というからである。

ト旗ウラーンムチルの創立から 2012 年までの組織の構成、上演作品、上演活動、奉仕[6]、隊員について中国語でまとめられたものであり、主編集者は劉増軍と張仲仁である。劉増軍はオンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局局長で、張仲仁はオンニュート旗地方誌事務局の元主任であり、両氏ともに漢族[7]である。また副編集として、オンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局副局長の王立柱、傲特根、李想、趙国新の 4 人と文化・体育・ラジオ局・テレビ局における紀律検査委員の隊長董華、ウラーンムチルの元隊長である張成富が参加している。傲特根だけモンゴル族で、他はすべて漢族である。また、筆者はこの資料にもとづき、ウラーンムチル隊員や関係者に対し聞き取り調査[8]を行っている。

3. 草創期におけるオンニュート旗とウラーンムチルの概要

3.1. 時代背景

1949 年に中華人民共和国が成立する。ウラーンムチルが創立されるのはその 8 年後の 1957 年であり、中国の反右派闘争[9]の真中であった。

その翌年の 1958 年に、集団所有制として人民公社が設立した。この人民公社は、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化事業も担う。さらには軍事機能ももっていた。

また 1958 年から大躍進という政策が実施された。大躍進とは、社会主義国家建設のスローガンの一つで、15 年の間に農工業の生産でイギリスを追い越そうという計画であった。具体的には、鉄鋼の大増産を目指すものであり、中国全人民が総動員でスローガンを叫び、社会全体が熱狂した。大躍進は、内モンゴルにおいて、特に草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与えた。また、「毛澤東は大躍進運動推進の一環として大々的な民歌・民謡の創作と収集を提案した」という（ミンガト 2016：114）。

翌年の 1959 年に中ソ対立が表面化し[10]、国境や領土について、意見の対立が深刻化した。1960 年にソ連は中国で仕事していた 1390 人の専門家を引き上げさせ、科学技術協力項目を廃止した（毛里 1989a：46-66）。

大躍進は、自然災害やソ連の技術者引き上げも加わって、1959 年から 1961 年の 3 年間で、数千万人の餓死者を出したとされる（黄 2013：51-57）。当時、中国では大躍進による

---

[6] 牧畜民や農民を手伝い、労働することをいう。農村、遊牧地域に入り、遊牧民、農民に生活、生産サービスを行う。例えば、図書の代理販売、撮影、散髪などである（紅 2013：172）。

[7] 本稿では、人を中国国家内の民族分類に従い、漢族、モンゴル族というように族で表記する。

[8] 2018 年 9 月にフィールド調査も行った。フィールド調査後、電話や SNS を通じても確認している。

[9] 毛澤東が発動する右派分子に対する思想・政治闘争をいう。右派分子は共産党の「天下」やプロレタリア独裁を批判した知識人を指す。1958 年から約 55 万人の知識人が冤罪で辺境地域への労働改造や失職などの憂き目に遭い、あるいは死亡した。

[10] 1950 年代後半から中ソ両党イデオロギー対立が始めた。きっかけは 1956 年のフルシチョフのスターリン批判であり、ソ連が平和共存路線をとるようになったことであった。1959 年にソ連は 57 年の「国防新技術についての協定」を廃棄している（毛里 1989a：63）。1969 年には国境河川で局地紛争さえ起っている（毛里 1989b：114）。

大量餓死事件を「自然災害」としていた（焦 2004：35）。毛澤東は大躍進の失敗について「七割は天災、三割は人災」としたが、劉少奇は「七割は人災、三割は天災」という言い方に変えた。このため、1959 年毛澤東は国家主席の座を劉少奇に譲ることになる。だが、毛澤東は中国共産党中央委員会主席と中央軍事委員会主席にとどまったのに対し、劉は党内序列が 2 位であり、事実上に毛を越える地位ではなかった。

劉少奇や鄧小平らは毛澤東が推進した大躍進政策を立て直そうと経済調整を行っていた。他方で、毛澤東は社会主義計画経済を理想とし、劉少奇や鄧小平らを「資本主義の実権派」と非難するとともに、教育、文化事業を通じて毛澤東崇拝を推し進めた。毛は大躍進の失敗を反省せず、劉に憤りを感じ権力の奪回を図った（陳 2016：102-106）。毛澤東は 1966 年に自らの復権をめざし、自身を崇拝する紅衛隊とよばれた学生たちや大衆を扇動し、文化大革命が勃発する（黄 2013：62）。

3.2 ウラーンムチル創立以前の文化事業

ウラーンムチル創立以前に文化事業を担っていたのが文化館であった。文化館は共産党の指導で、中華人民共和国成立以前からソ連の影響を受けて内モンゴル各旗県[11]に 1940 年代から設置されたものである。ソ連では 1920 年代～1930 年代に農村文化館が創立されていた。農村文化館はソ連の広大な農村地域の政治と文化教育事業の中心であり、クラブ[12]、図書館、宣伝扇動ステージ（站）という三つの機能をもっていた（王編 2000：172）。オンニュート旗には文化館が 1946 年に設置され、同様の役割を担っていた。

3.3 オンニュート旗の概要

赤峰市は内モンゴル東部地域に位置し、オンニュート旗は赤峰市の中央部に位置している（図 1）。面積が 11.88 万㎢である。1953 年における中国の第 1 回人口センサスによると全旗の人口は約 19 万人で、漢族が 17.1 万人と圧倒的に多く、約 9 割（89.88%）を占める。次いで多いのがモンゴル族で 1.9 万人、約 1 割（9.92%）を占める。その他に、回族が 221 人で、朝鮮族 125 人、満洲族 36 人、チベット族が 1 人いた。

11 年後の 1964 年の第 2 回人口センサスでは、全旗の人口は約 27.6 万人で、8.6 万人増加している。その内訳は、漢族が 24.6 万人（90.05%）で、7.5 万人も増加している。モンゴル族人口は 2.7 万人（9.65%）で、8 千人増加している。他に、回族が 359 人、満洲族 240 人、朝鮮族 125 人、チワン族が 14 人とチベット族やダウール族やシェ族が各 1 人である（翁牛特旗志編委員会編 1993：178）。満洲族が 204 人、回族が 138 人増えている、朝鮮族とチベット族は増えていない。

つまり、オンニュート旗では以上の民族を対象にウラーンムチルが創立された。

---

[11] 内モンゴル自治区の行政区画として首府はフフホト市である。自治区政府の下には、盟と都市があって、盟と都市の下位単位として旗・県がある。旗と県の下には、鎮と郷があり、一番下には村がある。
[12] 大衆性の文化教育機関である。労働者の文化娯楽や休憩のために設立している（王編 2000：117）。

この地域の主な生業は農業と牧畜業である。当地域では、1950 年代以前からモンゴル族は農業をしながら牧畜に従事していた。

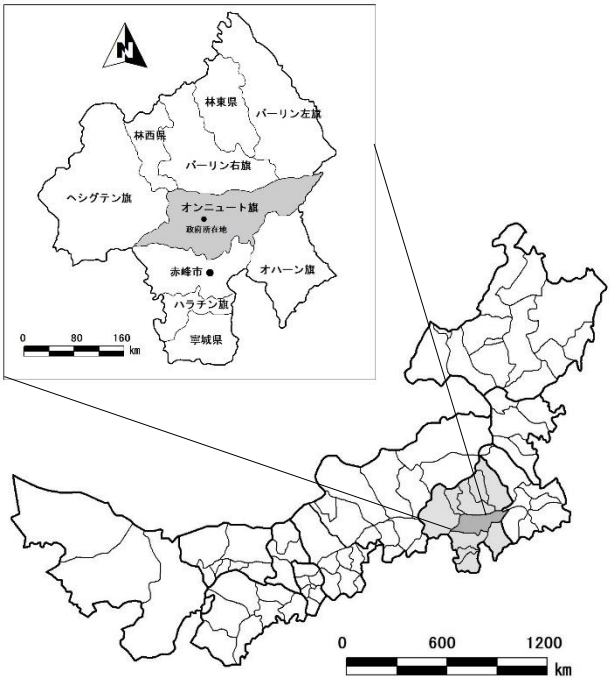

図 1 調査地域の赤峰市オンユート旗（筆者作成）

3.4 創立時のオンニュート旗ウラーンムチル

（1）創立の経緯

前述したように、ウラーンムチル創立以前に政治と文化教育の役割を担っていたのが文化館である。しかし、文化館は固定家屋で自由に移動できないことや人員不足から、政策伝達のため牧畜地域や半農半牧畜地域にまでアクセスできない事が問題となっていた。これについて各地域の文化機関が解決策を積み重ねてきた（内蒙古自治区文化庁編 1997 : 80）。その結果、内モンゴル文化処[13]は、解決策として小規模かつ移動性がある総合性の文化工作隊、つまり牧畜地域と半農半牧畜地域にウラーンムチルを作ることを内モンゴル自治区文化局の共産党組織部に提案した（内蒙古自治区文化庁編 1997 : 82）。当時内モンゴル自治区文化局は内モンゴルにおける文化部門の最高機構であった。

内モンゴル自治区文化局の副局長ブヘ（布赫）[14]はジョーオダ盟（現赤峰市）の文化処に依頼し、1957 年 5 月 28 日から 6 月 25 日の間に半農半牧畜地域のオンニュート旗ハイリ

13　内モンゴル自治区文化局に所属する下位行政組織の文化課である。

14　自治区文化局の副局長ブヘは当時内モンゴル自治区第一主席かつ共産党書記ウラーンフーの息子である。

ス（海力蘇）・ノタグ[15]でウラーンムチルを立ち上がるために実験（试点工作）を行った。そして、実験が終わった 1957 年 6 月 25 日にジョーオダ盟文化処の公文書に従い、「オンニュート旗の文化館をウラーンムチルに変更する公文書」（翁文字[1957]10 号）[16]を公布した（劉・張主編 2012：55）。これをもって文化館は一時的にウラーンムチルに代替され、オンニュート旗ウラーンムチルが正式に創立した。ただし、文化館が完全に廃止されたわけではなかった。

（2）オンニュート旗ウラーンムチルの概要

オンニュート旗ウラーンムチルの創立当時の隊員はわずか 4 名で、隊長 1 人と隊員 3 人から構成されていた。隊長は包文儒、隊員は烏国政、宝音、英格であった（内蒙古自治区文化庁編 1997：83）。さらに、辛吉勒図、徳力根の 2 人がいたという記録もある（劉・張編 2012：55）。すべてモンゴル族であった。包文儒と烏国政は文化館出身である（劉・張編 2012：121、125）。そのほかの隊員も文化館出身である可能性はあるが、資料に掲載されておらず、不明である。オンニュート旗ウラーンムチルはわずか人口が 1 割にも満たないモンゴル族だけで結成されていた。

設備は馬車 1 台、ガス灯 1 つ、幻灯機 1 つ、民族楽器 4 つ、12 着以上の民族衣装であった。

使用楽器は四胡、二胡、低音胡[17]、バイオリン、馬頭琴であった。

リハーサル室は約 20m^2 の文化室を使用していた。

上演は馬車を利用し、旗内の各村を巡回上演する形で実施された。また他地域のウラーンムチルと連携し、中国中央宣伝部、文化部の指示に従って、中国全土を巡回して上演することである。

4. オンニュート旗ウラーンムチルの上演作品

4.1. 上演作品一覧

ウラーンムチル草創期の上演作品についてまとめたのが表 1 である。

表 1 の項目は種類、演目作品名、由来、制作者／導入元からなる。

表 1 の演目の種類にはダンス、歌舞、オペラ、歌がある。ダンスは中国語で「舞踏」という。音楽に合わせて舞うことを指す。歌舞は、歌いながら踊ることを指す。

上演作品名は『オンニュート旗のウラーンムチル誌』に記載されている漢語名を日本語に翻訳したものである。聞き取りによると、ほとんどモンゴル語名があったという。

オンニュート政府は『オンニュート旗ウラーンムチル誌』を編集する時、何度も会議を開催し、元隊員にも呼びかけ上演作品や上演活動に関する様々な資料を集めた。しかし、

---

15 ノトグ（*notag*）はモンゴル語で、村を意味する。内モンゴル行政区画名で、末端の行政組織である。
16 1957 年にオンニュート旗政府が公布した文化に関する第 10 号公文書を指す。
17 構造は二胡と似ている。二胡より大きく、音声が小さくて柔らかい。

それでも記録されてない作品が少なくなく、これに記録されている上演作品はその年において、一番人気があり、上演率が高い作品であるという[18]。また、重複の作品名がないことから、その年に新規に上演された作品であると思われる。よって、1961 年をのぞいて毎年新規の作品が上演されていたと言える（表 1）。

由来にはオリジナルと改変と導入の 3 つがある。オリジナルはオンニュート旗ウラーンムチルが独自に創作したものである。また、すでにある歌に独自にダンスをつけたものについてもオリジナルとした。改変は民間で普及していたダンスを舞台用に編舞した作品をいう。導入とは他の少数民族地域における民間作品や内モンゴルの他の歌舞団の作品を演じたものである。

制作者とは歌やダンスなどについての作詞家、作曲家、振付師[19]、編舞者[20]である。導入の場合は導入元を記した。ダンスにおいては振付師と作曲家だけでなく、作詞家が存在する場合がある。制作者が不明なもの、一部しか分からない作品が少なくない。

由来、制作者／導入元について紀・邱編（1998）、内蒙古自治区文化局編（1965）、中国民族民間舞踏集成編集部編（1994）、金・張・寵編（2015）、趙編（2014）を参考にした。

表 1　草創期（1957 年～1965 年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
57	ダンス	搾乳員	導入	振付：高太（シリンゴル盟歌舞団団員：モンゴル族） 編舞：賈作光（内モンゴル歌舞団団員：満洲族）
58	ダンス	箸の踊り	改変	オルドス民間舞踊
59	ダンス	農楽踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		頂水踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		花傘踊り	導入	吉林省延辺歌舞団
		三月三	導入	黎族
		楽しむ羅蘇	導入	彝族自治州文工団
60	ダンス	タジク族の踊り	導入	ウイグル自治区歌舞団
		打ち鳴らす踊り	導入	ウイグル自治区歌舞団
		扇子踊り	導入	朝鮮族娯楽部→青海省歌舞団
		草原の夕方	導入	壮族の踊り→青海省歌舞団
	歌舞	葡萄の収穫	導入	ウイグル自治区歌舞団
		新疆は素晴らしい	導入	ウイグル自治区歌舞団
		花帽子を縫い取る	導入	ウイグル自治区歌舞団
		アラムハン	導入	ウイグル自治区歌舞団
		ウズベキスタン	導入	ウイグル自治区歌舞団
61	-	-	-	-
62	ダンス	頂碗踊り （収穫の祝い）	改変	編舞：宋正玉（隊員：朝鮮族） 作曲：祈・達林太（団員：モンゴル族）

18　W 氏のインタビュー（2016 年 3 月中旬）により整理したものである。W 氏は、1969 年生まれのモンゴル族で、男性である。1987 年にオンユート旗ウラーンムチルの成員として入隊した。2012 年にオンニュート旗ウラーンムチルの隊長になっている。

19　振付はオリジナルで創作した場合をいう。

20　振付の基にもっとアレンジし、舞台用に編集した人を指す。

		狼を狩る	オリジナル	振付：宝音（隊員：モンゴル族） 作曲：？
	オペラ	白毛女	導入	延安魯迅芸術学院
63	ダンス	草原の兵士	？	振付：？ 作詞：郝永生（？：？） 作曲：藩生憲（？：漢族）
		手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない	オリジナル	振付：朱志会（隊員：漢族） 作曲：？
		苦難の歳月	？	？
		我が故郷	？	振付：？ 原曲：モンゴル民謡 作詞：祈・達林太
		毛澤東が安源に行く	？	？
		小八路	？	振付：孟慶生（？：漢族） 作曲：？
		草打ち歌	オリジナル	振付：李玉珍（隊員：漢族） 作曲：？
		羊毛を刈る	オリジナル	振付：李玉珍 作詞：道爾吉永栄（？：モンゴル族） 作曲：？
		皿の踊り	改変	編舞：李玉珍 作曲：？
64	ダンス	パトロールの夜	導入	振付：祈・達林太 作曲：安柯欽夫（？：モンゴル族）
		良い社員	？	振付：保特斯（？：モンゴル族） 作曲：杜兆植（？：漢族）
		祖国のために訓練	導入	振付：アラシャー左旗ウラーンムチル 作曲：普日布（？：モンゴル族）
		モンゴル族と漢族は一つの家庭	オリジナル	振付：李玉珍 作詞：フルンボイル市阿栄旗 作曲：？
		幸福な青年	オリジナル	振付：李玉珍 作曲：？
		祖国防衛	？	振付：？ 作詞作曲：洗星海（作曲家：漢族）
	歌	文化軽兵隊の歌	オリジナル	作詞：鳥国政（隊員：モンゴル族） 作曲：甘珠爾扎布（？：モンゴル族）
		内モンゴルは素晴らしい	導入	作詞：阿迪娅（？：モンゴル族） 作曲：図力古爾（隊員：モンゴル族）
		賛歌	導入	モンゴル民謡 作詞：胡松華（歌手：漢族）
65	歌	草原の子女が延安を愛する	導入	作詞：朱嘉庚（宣伝部：漢族） 作曲：祈・達林太
		我々は文化軽兵隊	導入	内モンゴル・ウラーンムチル代表団
		共産党の教育が素晴らしい	？	作詞：達力瑪（？：モンゴル族） 作曲：劉国慶（？：？）
		赤旗は世代から世代へ	導入	原曲：オルドス民謡 作詞：那存（？：モンゴル族）
		草原に鋼鉄城が建設された	導入	原曲：モンゴル民謡 作詞：唐葉封（？：漢族）
		各民族の人民が毛主席の周りに団結する	？	？
		井岡山は赤色の山	？	？

		アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民の解放	？	？

？：不明
出典：劉・張編 2012；紀・邱編 1998；内蒙古自治区文化局編 1965；中国民族民間舞踏集成編集部編 1994；金・張・寵編 2015；趙編 2014

4.2. 各年の上演作品

（1）1957 年の演目

1957 年に上演された作品としてダンス「搾乳員」が記録されている（写真 1）。

写真 1　ダンス「搾乳員」
出典：通遼市ダルハン旗ウラーンムチルの壁写真より（2016 年 3 月，筆者撮影）

「搾乳員」の内容は、牧畜における労働生活を題材に少女たちの労働に熱心な姿を明るく描き（紀・邱編 1998：419）、民族の解放によって牧畜が安定し、繁栄した様子を讃えたものである。民族の解放とは当時国民党や日本などほかの国家の侵略や支配にあった少数民が共産党の指導によってその抑圧から抜け出せたことをいう。初めて上演された作品は牧畜生業に由来するもので、かつ共産党を賛美したものであった。「搾乳員」は牧畜を題材にした作品であるが、政治宣伝を目的としたものであるといえる[21]。

この作品は 1955 年に新たに創作された作品を導入したもので、振付は高太、編舞が賈作光である（趙 2014：19）。当時、高太はシリンゴル盟文工団に所属、賈作光は内モンゴル文工団の団員であった。

高太は 1934 年生まれ、ジェリム盟（現通遼市）出身のモンゴル族である。1951 年に内モンゴル文工団に就職し、1953 年にシリンゴル盟文工団に転職した。1962 年に再び内モン

[21]　文学作品も同様で、日本で小学校の国語の教科書にも採用され、よく知られた『スーホの白い馬』[21]はモンゴルの牧畜を題材にした物語であるが、実は中国共産党の階級闘争を背景に新たに作られた物語であることが明らかにされている（斉・宝力高 2001；ミンガド 2016）。

ゴル文工団に戻っている。内モンゴル文工団は 1946 年に創立し、文学と芸術活動を通し民間に政府の政策・方針の宣伝と普及を目指す団体である[22]。内モンゴルの首府フフホト市におかれ、内モンゴルにおける歌舞団の中で最も権威の高い団体であった。ウラーンムチルは盟・市や旗・県政府の管轄下にあり、内モンゴル文工団は当時ウラーンムチルを指導教育する立場にあった[23]。

賈作光は 1923 年生まれ[24]、遼寧省瀋陽市出身の満洲族である。1938 年に満洲映画協会（満映協会）に職を得、舞踊俳優として活躍し、満洲国が滅亡した後、1946 年に成立した内モンゴル文工団から舞踊団員として働くように要請された。満映協会は国策の映画会社で、満洲国の首都であった新京（現吉林省長春市）にあり、「チンギス・ハーンの歌」などモンゴルの歴史をテーマにした映画を制作していた（藤澤編 1938）。賈作光は内モンゴル文工団で数多くの作品を手がけ、中国モンゴル族舞踊の父[25]とも言われる（寵 2014：116）。彼は、現代舞踊家石井漠の門下で、現代舞踊、バレエ、日本の民間舞踊及び朝鮮舞踊を習った（寵 2014：119）。当時、内モンゴル文工団で作られた作品は当文工団での上演のみに限らず、ほかの文工団[26]やウラーンムチルに導入されていた。

（2）1958 年の上演作品

1958 年の上演作品はダンス「箸の踊り」が記録されている。「箸の踊り」はオルドス地域でモンゴル牧畜民が余暇な時間や祭りを機にお酒を飲みながら、テーブルにある箸、酒盃、皿などを持ってたたいてリズムを作り、そのリズムに合わせて踊っていたものを改変したものである（中国民族民間舞踏集成編集部 1994：85）。作品化した人物については不明である。

（3）1959 年の上演作品

1959 年に記録された上演作品はすべてダンスで 5 作品があり、他の少数民族の作品を導入したものである。「農楽踊り」、「頂水踊り」、「花傘踊り」は吉林省延辺歌舞団から、「三月三」は黎（リー）族から、「楽しむ羅蘇」は彝（イ）族自治州文工団からである。吉林省延辺歌舞団は朝鮮族が主体である。

「農楽踊り」の制作年は 1952 年である。「頂水踊り」ともいう。水を入れたお碗を頭の上において踊る（紀・邱編 1998：336）。この作品は民間の踊りにもとづいたもので、かつ

22　文工団とは、歌、ダンス、芝居など様々な手段で宣伝活動を行う総合的な文芸団体のことをいう（貴志 2000：241）。中国では文学と芸術の工作団体を略称して文工団という。中国共産党には、政治宣伝の担い手として文工団が作られていた（松浦 2000a）。

23　現在、内モンゴル文工団は内モンゴル歌舞団として改名され、内モンゴル民族芸術劇団に属している。

24　2017 年 1 月 6 日没。

25　モンゴル族には元から舞踊の文化がある。賈作光はむしろそれを発展させたという意味で、モンゴル族現代舞踊の父というほうがふさわしいだろう。

26　内モンゴルでは、文工団（のちに歌舞団と改名）以外にウリゲル（物語）・モンゴル劇団、モンゴル青年合唱団、京劇団などがある。

て農民軍の演習が終わった際に行われていた。祝祭的な意味があり、のちに祭祀や祝日に踊るようになっていた（紀・邱編 1998：310-312）。労働や収穫の喜びとともに、国家の安定と繁栄を表現している（紀・邱編 1998：419）。

「花傘踊り」は哈尼（ハニ）族の祖先神の祭りで踊られていたダンスを作品にしたものである。哈尼族とは中国の少数民族の一つで、主に雲南省西南部に暮らす。その由来は以下のとおりである（紀・邱編 1998：244-245）。

> 哈尼族の祖先の命がハッカン鳥[27]によって救われたという。哈尼族はハッカン鳥に感謝するため、シュロの木で扇子を作り踊る。ハッカン鳥の力で安楽で繁栄する生活を送ることを祈る。

「三月三」は黎族のダンスで、創作年は 1957 年である。黎族とは中国の南部地域の少数民族の一つで、約 90 パーセント以上が海南島に住む。黎族の祭りに若い男女が集まりダンスで恋愛する様子を表現している。この作品は共産党の革命による民族の解放によって自由自在に恋愛していることを賛美している（紀・邱編 1998：421）。

「楽しむ羅蘇」は彝族のダンスで、1959 年に創作された。彝族とは中国南部地域の少数民族の一つである。羅蘇は彝族の男性の名前である。彝族の民間祭りのダンス「瓦子嘿」にもとづいて作られた作品である。彝族人民の解放の喜びを描き、解放によってもたらされた幸せな生活を讃えている（紀・邱編 1998：417-418）。

（4）1960 年の上演作品

1960 年に記録された上演作品は 9 作品あり、ダンスが「タジク族の踊り」、「打ち鳴らす踊り」、「扇子踊り」、「草原の夕方」の 4 作品、歌舞が「葡萄の収穫」、「新疆は素晴らしい」、「花帽子を縫い取る」、「アラムハン」、「ウズベキスタン」の 5 作品である。この年からダンスだけでなく歌舞が上演されるようになっている。すべて他の少数民族地域の作品を導入したものである。

「タジク族の踊り」はタジク族のダンスの総称である。タジク族は主に新疆ウイグル自治区に居住する少数民族で、主な生業は牧畜である。具体的に「チャブソマイ踊り」や「マイリス踊り」や「馬踊り」などがある。「チャブソマイ踊り」とは、男女の 2 人組が空飛ぶ鷹の行動を模倣して踊る。鷹のスピード、速さ、力強さを表現する。「マイリス踊り」は、特定の祝日に踊るもので、娯楽性があるとともに、祝祭の意が含まれている。「馬踊り」は、馬の模型を使って馬の疾走、跳び方、回り方、鳴き方などを表現する（紀・邱編 1998：332-333）。これは 1960 年、オンニュート旗ウラーンムチルが新疆ウイグル自治区歌舞団に隊員を派遣し、導入したものである。

---

[27] 白鵰, キジ目キジ科に分類される鳥類の一種。

「打ち鳴らす踊り」も新疆ウイグル自治区歌舞団から導入したものである。その内容などについては不明である。

「扇子踊り」は、解放と幸福生活を描いたダンスである。制作者は吉林省龍井県朝陽川鎮の朝鮮族の娯楽部[28]である（紀・邱編 1998：419）。収穫と労働の喜びを表現し、共産党や政府の政策を賛美している。青海省歌舞団に学び、導入している（劉・張編 2012：56）。

「草原の夕方」は壮（チワン）族由来であるが、「扇子踊り」と同じく青海省歌舞団から導入したものである。壮族は、中国最大の少数民族で、広西チワン族自治区中西部や雲南省、広東省、貴州省、湖南省などの山間部に分部している。内容などは資料に記載がなく不明である。

歌舞 5 作品はすべて新疆ウイグル自治区歌舞団から導入されたものである。

歌舞「葡萄の収穫」の制作年は 1959 年である。内容はウイグル少女の収穫の喜びと労働を表現したものである（紀・邱編 1998：419-420）。「搾乳員」と同じく、豊かな収穫が民族の解放によってもたらされたこと、その結果としての労働者の安定した豊かな生活を賛美している。

歌舞「新疆は素晴らしい」は、新疆ウイグル自治区の草地の広さや農業が盛んになったことを賛美した作品である。この作品で描かれる豊かな生活はすべて毛澤東と共産党のおかげであり、各民族[29]と人民が団結し、毛澤東を讃えるべきだ、と歌う。この作品は共産党による民族解放やそれによる安定した生活は毛澤東のおかげとし、毛澤東個人崇拝の歌である。

歌舞「花帽子を縫い取る」、「アラムハン」、「ウズベキスタン」について詳細は不明である。

（5）1962 年の上演作品

1962 年に記録された上演作品はダンス「頂碗踊り」、「狼を狩る」とオペラ「白毛女」である。

ダンス「頂碗踊り」は別名「収穫の祝い」ともいう。1959 年からウラーンムチルの隊員として働いていた宋正玉[30]が牧畜を手伝った経験をもとに創作したとされる。宋正玉は 1944 年生まれの朝鮮族女性である。その趣旨は「我々が今日のように新鮮なミルクを生産しているのは、すべて毛主席のお陰であり、このミルクを毛主席に捧げる」ことである（劉・張編 2012：37-38）。だが、この作品は朝鮮族のダンス「収穫の祝い」をもとにしたものとされ（鳥 2002：75）、朝鮮族の宋正玉がこの作品をもとに、牧畜地域にあわせて改変したと思われる。作曲は内モンゴル文工団団員の祈・達林太である（劉・張編 2012：38）。祈・

28　大衆向けの文化・教育の機構である。労働者の文化、娯楽のセンターとして会議、音楽会、映画、講演会などを行う（王編 2000：117-118）。

29　漢民族を含む他少数民族を指す。

30　1974 年にウラーンムチルを離職している。

達林太[31]は内モンゴル文工団団員とあるが、詳しい記載はない。内モンゴル直属ウラーンムチルウリガ隊員への聞き取りによると祈・達林太はモンゴル族という[32]。この作品は、モンゴル民族の牧畜作業を題材に毛澤東崇拝と共産党を讃えたものである。

ダンス「狼を狩る」は狼狩りをモチーフにしたものと思われるが、詳しい記載はない。狼はモンゴル民族の家畜にとって危険な動物であると同時に、モンゴル民族の始祖伝説においては神聖視される（鯉渕 1992：144-145）。ウラーンムチル最初のオリジナル作品である。振付は宝音で、創立時からのオンニュート旗ウラーンムチル隊員である[33]。作曲は不明である。

オペラ「白毛女」は鳥丹評劇団と合同で上演した作品である（劉・張編 2012：57）。鳥丹評劇団の鳥丹はオンニュート旗の行政区画盟で、鳥丹鎮[34]からとったものである。評劇団は漢族の戯劇の一種で、社会を評論した内容を扱う歌舞団を指す。「白毛女」は共産党の革命を称えたオペラである。白毛女という名の美しい女性が強制的に地主に嫁がされたが、共産党の紅軍により救われるというものである。漢民族による革命を讃えた歌劇「白毛女」をウラーンムチルと評劇団が合同で演じた。原作は延安魯迅芸術学院とあるが（松浦 2000b：166）、具体的な制作者は不明である。

（6）1963 年の上演作品

1963 年に記録された上演作品は 9 作品で「草原の兵士」、「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」、「苦難の歳月」、「我が故郷」、「毛澤東が安源に行く」、「小八路」、「草打ち歌」、「羊の毛を刈る」、「皿の踊り」である。すべてダンスである。

ダンス「草原の兵士」は同タイトルの歌をもとに作られたと考えられる。その内容は国防のために国境を守る兵士を讃えた内容である。具体的には共産党の教育のもとで国境にある兵士が様々な困難を乗り越えながら国境を警備している様子を表現している。作曲は藩生憲、歌もあり、作詞は郝永生となっている（内蒙古自治区文化局編 1965：63）。両者について詳細は不明である。振付は不明である。

ダンス「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」の詳細な内容は不明であるが、タイトルにある階級という言葉から階級闘争を描いたものと思われる。階級闘争とは資本家階級と労働者階級の対立をいう。つまり、反右派闘争の影響を受けていると考える。振付は朱志会である。朱志会は 1945 年生まれの漢族男性である。1960 年にオンニュート旗ウラーンムチルの隊員になり、1971 年にウラーンムチルを離職している。15 歳で隊員になり、

31　資料によって祁・達林太とも記されている。本稿では祈・達林太に統一する。

32　2020 年 2 月 21 にウィチャットで確認した。隊員のウリガは 1961 年生まれのモンゴル族である。1978 年にオンユート旗ウラーンムチルで入職し、1987 年から内モンゴル直属ウラーンムチルへ転職している。

33　生年は不明。1961 年に離職している（劉・張編 2012：19）にもかかわらず、作品を創作している。ウラーンムチルを離職した後、恐らく文化館で働いていたと考える。ウラーンムチル創立後も文化館は活動しており、文化館とウラーンムチルはお互いに活動の計画と作品の創作などで協力し合っていた。

34　鳥丹鎮はオンニュート旗人民政府所在地である。

わずか 17 歳でこの作品を制作している。作曲は不明である。

ダンス「苦難の歳月」は制作者と内容は不明である。そのタイトルから解放前の封建社会や階級闘争の苦しみを描いた作品と思われる。振付や作曲は不明である。

ダンス「我が故郷」の内容は、草原に広がる麦畑と新たに建設された工場を讃えて、共産党の指導で祖国や故郷が繁栄していたことを描いている（内蒙古自治区文化局編 1965：81）。草原に広がる麦畑から、草原の開墾が推奨されていることが示唆される。「頂碗踊り」を作曲した祈・達林太がモンゴル民謡のメロディーに作詞している。振付は不明である。

ダンス「毛澤東が安源に行く」は、1921 年に毛澤東が湖南の安源という地方を通過するとき、工場で働いていた労働者と協力し革命を遂行する様子を描いた作品である[35]。制作者は不明である。この作品も毛澤東を讃えたものである。

ダンス「小八路」は中国の抗日戦争を背景にした内容である。タイトルの八路とは、共産党軍、もしくは解放軍を指す。「小」は少年や児童を指している。抗日戦争中、一人の少年の妹が負傷して死亡した。その少年は、八路軍の教育を受けたのち、敵討ちをしたという[36]。共産党の革命と民族解放を賛美して作品である。振付は孟慶生となっている。孟慶生について詳細は不明である。作曲も不明である。

ダンス「草打ち歌」の内容は不明である。作品名から牧畜地域の草刈りの様子を描いたものと思われる。振付はウラーンムチル隊員の李玉珍である。李玉珍は 1945 年生まれの漢族女性である。創立翌年の 1958 年にウラーンムチルの隊員に加わっている[37]。

ダンス「羊毛を刈る」も李玉珍の振付である。内容について『オンニュート旗ウラーンムチル誌』に記載はないが、1960 年に中国民間文芸研究会が編集した内モンゴル歌舞に関する資料には「羊毛を刈る歌」という歌が掲載されている。そこでは、羊毛は牧畜民の財産であり、また、寒さを耐えるために羊毛が使用されていることが描かれている。作詞は道爾吉永栄と書いているが、詳細は不明である（中国民間文芸研究会編 1960：253）。この歌をもとにダンスを振付したものと思われる。

「皿踊り」の振付も同じく李玉珍であるが、ウイグル民族のダンスを改変したものである。「皿踊り」はウイグル民族の祝日と祭日を祝うダンスで、男女 5 人が喜びを表現する。解放の喜びと解放によってもたらされた幸福な生活を讃えた作品である（紀・邱編 1998：418）。皿はウイグル民族やモンゴル民族の中で、訪問客を迎える際に出す果物や乳製品、肉食品の入れ物として重要視されている。作曲は詳細不明である。

（7）1964 年の上演作品

1964 年に記録された上演作品はダンス 6 作品と歌 3 作品である。ダンス「パトロールの夜」、「良い社員」、「祖国防衛のための訓練」、「モンゴル族と漢族は一家」、「幸福な青年」、

---

35 2003 年には映画化されている。
36 1973 年にはアニメ化されている。
37 1997 年にウラーンムチルを離職している。

「祖国防衛」で、歌が「文化軽兵隊の歌」、「内モンゴルは素晴らしい」、「賛歌」である。

ダンス「パトロールの夜」の内容は社会主義建設のため、国境地域を真夜中にパトロールする兵士を讃えたものである（内蒙古自治区文化局編 1965：98）。振付は内モンゴル文工団団員の祈・達林太で、作曲は安柯欽夫である。安柯欽夫について詳細は不明である。

ダンス「良い社員」は人民公社の女性が人民の財産である羊の群れを災害から守る行動を描いた物語である。振付は保特斯、作曲は杜兆植である（内蒙古自治区文化局編 1965：94）。この 2 人について詳細は不明である。この作品は、共産党の教育のもとで育った人民公社の社員の献身的貢献を讃えたものである。

ダンス「祖国のために訓練」の内容はモンゴルのナーダム祭りのために弓矢の訓練の様子を描いたもので、射場に人形を置き、敵の心臓と見立てて矢を放つ。これはその訓練の様子を祖国防衛のための軍事訓練と位置付けた作品である（内蒙古自治区文化局編 1965：90）。この作品は祖国防衛とそれに従事する兵士を讃えたものである。振付はアラシャー左旗ウラーンムチル、作曲は普日布である。普日布について詳細は不明である。

ダンス「モンゴル族と漢族は一つの家庭」は、歌「モンゴル族と漢族は一つの家庭」をもとに作られたと考える。内容は一本の木に二輪の花があるようにモンゴル族と漢族は一つの家庭であり、共産党の指導下で永遠に変わらないことを描いたものである（中国民間文芸研究会編 1960：37）。作詞由来はフルンボイル市の阿栄旗と書いているが、詳細は不明である。振付は隊員の李玉珍である（劉・張主編 2012：40）。作曲は不明である。

ダンス「幸福な青年」の内容は不明である。振付は隊員の李玉珍である（劉・張主編 2012：40）。作曲は不明である。

ダンス「祖国防衛」は、歌「祖国防衛」をもとに作られたと考えられる。内容は祖国防衛のために戦っている国境にいる兵士を讃えたものである。作詞作曲は洗星海で、広東省の漢族男性である（音楽出版社編 1965：25）。洗星海は、1905 年生まれで、1945 年に亡くなっている。彼は作曲家でピアノ演者でもあった。この作品がいつ作られたのかは不明である。

次に、歌であるが、まず「文化軽兵隊の歌」はウラーンムチルの機能や活動を紹介するものである。この歌の内容は、ウラーンムチルは共産党の宣伝隊であり、一人が多くの技能を持ち、社会主義の新たな文化を牧畜民や農民に宣伝しているというものである（内蒙古自治区文化局編 1965：39）。作詞はオンニュート旗ウラーンムチル隊員の鳥国政で、1934 年生まれのオンニュート旗出身のモンゴル族男性である。1953 年にオンニュート旗文化館で働き、創立時からのウラーンムチル隊員である。作曲は甘珠爾扎布である。甘珠爾扎布については不明である。この作品は共産党や社会主義思想を賛美したものであると考える。

歌「内モンゴルは素晴らしい」の内容は、内モンゴルの自然環境及び包頭鉄鋼業[38]の繁栄とそれをもたらしてくれた共産党と毛澤東を讃えたものである。作詞は阿迪娅で、作曲

[38] 当時、包頭市を鉄業の重工業都市として開発が進んでいた。

は図力古爾である（内蒙古自治区文化局編 1965 : 68）。阿迪娅について詳細は不明である。図力古爾は 1943 年生まれのモンゴル族の男性で、1963 年からジリェム盟（現通遼市）フレー（庫倫）旗ウラーンムチルの隊員になっている。1966 年に内モンゴル自治区直属ウラーンムチルに転属している。

歌「賛歌」は中国の各兄弟民族が解放されたのはすべて共産党と毛澤東のお陰であると讃えたものである（于・赫編 1997：197-198）。各兄弟民族とは中国の漢民族を含む他少数民族を指す。この作品は、共産党の革命・民族解放や毛澤東崇拝や民族団結などを讃えたものである。作詞は胡松華である。胡松華は 1931 年生まれ、北京出身の満洲族で、歌手であった。1949 年に華北大学の第三文工団で働き、1952 年から中央民族歌舞団団員になっている。作曲はシリンゴル盟東ウジムチン旗の民謡「サロール・タル（*sarul tala*, 広々した草原の意）」（巴 2001：484）を改変したものである[39]。

（8）1965 年の上演作品

1965 年に記録された上演作品は 8 作品で、すべて歌である。

歌「草原の子女が延安を愛する」の内容は延安における革命を讃えたものである。作詞は朱嘉庚で、作曲は祈・達林太である。朱嘉庚は、オンニュート旗の宣伝部から赤峰市文化局へ転職し、のちに文化局の局長まで昇進した。この作品はオンニュート旗宣伝部から導入したと言えよう。制作者の 2 人が延安に巡回上演に向かう途中で書いたとされる。延安は中国共産党の革命聖地、或いは革命根拠地である。延安への巡回上演は革命精神を学ぶことが目的であった（劉・張編 2012：42）。

歌「我々は文化軽兵隊」の内容は、ウラーンムチルを毛澤東や共産党の指導で文化、教育の普及を担う兵士に例え、ウラーンムチルの機能と役割を紹介するものである。作詞作曲は内モンゴル自治区ウラーンムチル代表団となっている（内蒙古自治区文化局 1965：36-37）。この作品も共産党や社会主義思想を賛美したものである。

歌「共産党の教育はすばらしい」の内容は、共産党の教育を太陽の光に例えたものである。太陽の光で万物が育ち繁栄する。同じように、共産党の教育下で、経済、人民公社、教育が繁栄している。作曲はウラーンムチル隊員の達力瑪、作詞は同じく隊員の劉国慶である（内蒙古自治区文化局編 1965：41）。2 人の詳細については不明である。

歌「赤旗は世代から世代へ」は、毛澤東の指導を賛美した作品である。世代がかわっても赤旗、つまり革命の精神が継承されることを歌ったものである。メロディーはオルドス民謡[40]をもとにしており、那存が作詞したものである（内蒙古自治区文化局編 1965：46）。那存について、詳細は不明である。

歌「草原に鋼鉄城が建った」は、内モンゴル自治区の包頭に毛澤東の指導下で建築され

39　この歌は、2019 年 6 月に中国中央宣伝部が主催した「中華人民共和国成立 70 周年をお祝いする優秀 100 首歌」に選抜されている。

40　オルドスはモンゴル地域の地名で、オルドス民謡はモンゴル民謡の一つである。

た鋼鉄工場を讃えたものである。モンゴルと漢族が団結し、鋼鉄を生産し、社会主義を建設していると歌う。モンゴル族の民間歌謡のメロディーに、唐葉封が作詞したものである（内蒙古自治区文化局編 1965 : 72）。民族団結や共産党や社会主義思想などを讃えている。唐葉封について詳細は不明である。

歌「各民族の人民が毛主席の周りで団結する」の歌詞、作詞作曲者は不明である。タイトルから、民族の団結と毛澤東崇拝を賛美した作品と考えられる。

歌「井岡山は赤色の山」の歌詞および作詞作曲者は不明である。井岡山は延安に並び共産党の革命根拠地と言われる。赤色の山というのは、革命が激しくて血を流したことを意味する。この作品は、共産党革命を讃えたものと考えられる。

歌「アフリカ・アジア・ラテンアメリカ人民の解放」の歌詞および作詞作曲者は不明である。当時の中国は、北朝鮮やベトナムなど社会主義国家を援助し、帝国主義や侵略主義と戦っていた時期であった。こうしたなか、内モンゴルの各地域のウラーンムチルでは「反帝国進行曲」、「ベトナムを支援し、アメリカに反対する」、「英雄ベトナム人が必ず勝利する」などの歌が作られていた（内蒙古自治区文化局編 1965 : 82、83、148）。当時の政治情勢に合わせて作られたのであろう。

5. 草創期における上演作品の総括

本章では、草創期ウラーンムチルの上演作品を以下の6つに着目して検討する。

①ウラーンムチル創立の由来

ウラーンムチルは、文化館をもとに創立された。当時文化館はソ連の文化館を模倣して創立されたものである。文化館の目的は牧畜民や農民に対し政治と文化教育の工作を行うことであった。しかし、文化館は旗の中心町にあり、固定されて場所で移動できない。こうしたなか、内モンゴル文化処が旗・県の文化機構の提案をまとめ、内モンゴル文化局の共産党組織部に提出した。その結果、小規模で移動性があり、かつ総合性の歌舞団としてウラーンムチルが創立された。ウラーンムチルの創立は、ソ連の影響を受けたといえる。

またウラーンムチルはソ連だけではなく、日本の植民地であった満洲国の影響も受けている。日本人は内モンゴルの東部地域や西部地域を統治するために、文芸団体や満映協会などを作っていた。特に満映協会において、満洲国の建国理念や国策の基で舞踊の俳優として働いていた賈作光は内モンゴル文工団で働きのちにウラーンムチルの上演作品に影響を与えている。

②上演作品数とその種類

資料から判明した上演作品は合計で45作品である。そのうち、ダンスが28作品、歌舞が5作品、オペラが1作品、歌が11作品である。

上演作品数を年毎に見ると、1957年と1958年は1作品のみであるが、1959年からは5作品と急増する。特に多いのが1960年と1963年以降で、毎年8～9作品創作されている。

創立当時の2年間でわずか2作品であったことはそもそも上演作品自体が少なく、かつ、上演のノウハウがなかったためであろう。

ウラーンムチル創立初期において、その上演作品はダンスが中心であった。歌舞は1961年に、オペラは1962年に上演されたのみである。歌はさらに遅く、7年後の1964年からである。しかし、1965年には歌のみとなる。歌はその内容を直接的に伝えるため、よりメッセージ性が強いと言える。

③上演作品の由来

上演作品の由来は導入と改変とオリジナルの 3 つである。導入が 24 作品、改変が 3 作品、オリジナルが 7 作品、制作者が不明で、由来の判断がつかない作品は 11 作品である。初期に多いのが導入で、1962 年からオリジナルが出現する。

導入は内モンゴルの他の機関の作品と他の少数民族地域の作品を上演したものに分けられる。

内モンゴルの他機関からの作品導入は 5 作品である。まず 1957 年の第一上演作品が内モンゴル文工団（歌舞団）から導入したダンス「搾乳員」と 1964 年のダンス「パトロールの夜」であった。他の 3 作品は 1964 年にアラシャー左旗ウラーンムチルからダンス「祖国のための訓練」と 1965 年に内モンゴル・ウラーンムチル代表団から歌「我々は文化軽兵隊」とオンニュート旗宣伝部から歌「草原の子女が延安を愛する」であった。

他の少数民族歌舞団から導入した作品は全14作品で、1959年のダンス5作品と1960年のダンス4作品、歌舞5作品である。1959年と1960年の上演作品はすべて他の少数民族歌舞団から導入した作品であった。同時に、導入先の歌舞団において制作されていた作品はすべてダンスであった。創立当時、他の少数民族の歌舞団と積極的に交流していたことがうかがえる。それとともに、こうした文化事業が1950年代後半から既に中国の少数民族地域全体で展開していたことが分かる。

改変は 1958 年の内モンゴルのオルドス地域の民間舞踊 1 作品「箸の踊り」と他の少数民族のダンスを編舞した作品 2 作品、1962 年の朝鮮族の「収穫の祝い」と 1963 年のウイグル族の「皿の踊り」である。それまでの導入とは違い、他の少数民族の作品をそのまま模倣して上演するのではなく、自分たちで編舞するようになっている。

オリジナルはウラーンムチル隊員自らが制作したもので、創立から 5 年後の 1962 年以降 7 作品が上演されている。ただし、作詞作曲、振付など一部しか分かっていない作品がほとんどである。

創立当初はすでに完成した作品を模倣し、導入した作品を上演していたが、徐々に他地域の作品や民間民謡などを独自に改変するようになる。5 年後にはオリジナルの作品を発表するようになっている。

④上演作品の制作者

所属が分かっている制作者を見ると、1957 年の上演作品である「搾乳員」は当時シリンゴル盟文工団に所属していた高太が振付し、それを舞台用のダンスとして編舞したのが内モンゴル文工団団員の賈作光であった。賈作光は満映協会での経験を活かして、内モンゴル文工団で舞踊家として働き、ウラーンムチルに大きな影響を与えた人物である。

内モンゴル文工団団員の祈・達林太は 1962 年「頂碗踊り」の作曲に加え、1963 年ダンス「我が故郷」の作詞、1964 年ダンス「パトロールの夜」の振付、1965 年歌「草原の子女が延安を愛する」の振付と、多才にオリジナル作品を発表している。またオンニュート旗宣伝部の朱嘉庚は、歌「草原の子女が延安を愛する」に作詞している。

内モンゴル直属ウラーンムチル隊員の図力古爾は 1964 年歌「内モンゴルは素晴らしい」を作曲している。

オンニユート旗ウラーンムチル隊員自身の作品はまず改変で 1962 年、朝鮮族の宋正玉編舞の「頂碗踊り（収穫の祝い）」である。

同年、オリジナル作品も初めて上演されており、創立メンバーであるモンゴル族の隊員宝音が「狼を狩る」の振付をしている。

漢族の隊員朱志会は 1963 年にわずか 17 歳でダンス「手に銃を握り、階級の苦しみを忘れない」を振付している。

漢族の隊員李玉珍は 1963 年にダンス「草打ち歌」、「羊毛を刈る」といった牧畜作業を題材にして創作している。さらに同年ウイグル族のダンス「皿の踊り」をもとに作品の改変もしている。李玉珍は翌年の 1964 年にはダンス「モンゴル族と漢族は一つの家族」と「幸福な青年」の振付もしている。

モンゴル族の隊員烏国政は 1964 年に歌「文化軽兵隊の歌」に作詞している。「アマチュア」隊員が民族問わず、作品を作るようになっている。

⑤ウラーンムチル隊員構成の変化

創立当時、隊員は 6 名のみ、すべてモンゴル族であった。そのうち 2 人が文化館の出身である。創立の翌年の 1958 年から漢族の李玉珍や朝鮮族の宋正玉などモンゴル族以外も隊員として参加していることが分かる。

創立当時すべてモンゴル族であったことは、モンゴル地域的かつモンゴル文化を重要視しているように見える。しかし、後から漢族や朝鮮族を入れたことは、モンゴル地域において、モンゴル族だけではなく、漢族や他の民族が居住していたことに配慮したと考えられる。さらに、中国の社会主義建設において、多民族の協力が求められたのであろう。

⑥上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。政治性（シンジルト2010）や社会主義思想の宣伝（紅2013）について、その内容は多岐にわたることが明らかになった。

まず、政治性がないと言い切れる作品はわずかである。内容については、文献の説明によるものであり、とりわけダンスによるメッセージをどのように読み取るのかはむずかしいところがある。とはいえ、参照した文献で政治的といえる内容としていないものは1958年ダンス「箸の踊り」、1959年ダンス「花傘踊り」、1960年ダンス「タジク族の踊り」、1963年ダンス「羊の毛を刈る」のわずか4作品である。また1962年ダンス「狼を狩る」と1963年ダンス「草打ち歌」は政治性がないと思われるが、内容の詳細は不明である。それ以外は、とりわけ、創立初期の上演作品の内容の特徴は労働と収穫を描きつつ、共産党による民族解放とそれによる安定した生活を賛美している。

少数民族を題材にした作品の中には1957年のダンス「搾乳員」や1963年のダンス「草打ち歌」と「羊毛を刈る」のようにモンゴルの牧畜を題材にしている作品もある。とりわけ「草打ち歌」と「羊毛を刈る」は漢族の隊員である李玉珍が振付している。これらは題材を牧畜に求めてはいるが、紅が指摘するように民族文化の普及を目指したものとまで言えるかどうか疑問である。草創期において、遊牧民が好む文化芸術を上演していた（紅2013）というよりむしろ、「社会主義思想」の宣伝のために観客である牧畜民に身近な題材を取り入れた、というほうが適しているであろう。これは他の少数民族の作品でも同様である。

初期に見られた共産党による民族解放と安定した生活という内容が大きく変化するのが1963 年からである。1963 年には上演作品数も増えるとともに、共産党による革命と民族解放にくわえ、社会主義思想、毛澤東崇拝、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争がテーマになってくる。大躍進政策はその後も草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与え続けていた。ただし、毛澤東崇拝は 1960 年にすでに見られる。上演作品に「大躍進の負の側面」や飢饉の克服を題材にしたものはない。

また複数のテーマを持つ作品も少なくない。例えば、1960年の歌舞「新疆は素晴らしい」は毛澤東だけでなく、共産党による民族解放も讃えている。1964年の歌「賛歌」は共産党の革命・民族解放、毛澤東崇拝、民族団結などを讃えている。また1965年の歌「草原に鋼鉄城が建設された」は、民族団結や共産党や社会主義思想、大躍進政策などを讃えたものである。

さらに、上述したこうした歌舞は、モンゴル民謡のメロディーを基に振付や歌詞を加えることが多かった。具体的には、1963年のダンス「我が故郷」と1964年の歌「賛歌」はモンゴル民謡に、1965年の歌「赤旗は世代から世代へ」と「草原に鋼鉄城が建設された」はオルドス民謡とモンゴル民謡に振付し、或いは歌詞を加えたものである。

上演の種類で1964年から歌が多く上演されるようになるが、その内容を直接的に伝えるためにとられた手段だったとも言えるのではないか。また、国防に関するものなど、国際的な状況を反映したものとなっている。

最後に、オンニュート旗は半農半牧地域であるが、農業をテーマにした作品はない。オンニュート旗に由来する作品がないのも特徴である。

ウラーンムチルの上演作品から政府の当時のあらゆる政策が作品化されていたことが窺える。まさに社会主義思想の宣伝が重要視されていたことが分かる。その社会主義思想とは、

いわゆる労働者階級の利益や生産手段の共有を提唱した思想であり、さらに毛澤東思想や共産党や国防警備及び民族団結などを讃えたものであった。他方で、資料による限り、民族文化を扱った作品は少ない。地域をテーマにした作品は皆無であった。

6. おわりに

ウラーンムチルは文化館をもとに文化館の代替として作られた小規模的で移動性があり、かつ総合性の歌舞団である。ウラーンムチルの創立は、ソ連の文化館の影響を受けたとともに、満洲国時代の満映協会の影響を受けている。上演作品について創立当時は、オリジナル作品がなかったことから、ほかの歌舞団の作品を模倣し、改変して演じ、また多くの作品を導入していた。5年後には隊員が作品を制作するようになっている。

上演作品は当時の政策を反映したもので、共産党革命、民族解放、社会主義思想、毛澤東崇拝、国防兵士、民族団結、大躍進政策、階級闘争など政策宣伝が重要視されていた。民族文化はむしろその目的のために利用されたといえるかもしれない。オンニュート旗という地域性はまったく無かった。

今後の課題として草創期以降の上演作品や文化政策を中心に分析していきたい。

謝辞

本稿は2年におよぶプロジェクト研究の成果をまとめたものです。この間、プロジェクト研究会を5回、そのうち2回はワークショップの形で実施されました。その際、千葉大学文学部の名誉教授である荻原眞子先生により貴重なコメントを頂きました。本稿を完成するに当たり丁寧に指導して頂いた千葉大学文学部児玉香菜子先生に感謝します。さらに、プロジェクト研究会の報告では、丁寧なアドバイスやコメントを頂いた千葉大学文学部の吉田睦先生、中川裕先生、小谷真吾先生に感謝を申し上げます。

本研究はJSPS科研費17H01639アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析―「近代世界システム」との相克―（研究代表者：嶋田義仁中部大学特任教授）の助成を受けたものです。

最後に、本研究の趣旨を理解し、何度も協力し、資料提供やインタビューに応じていただいたオンニュート旗ウラーンムチル隊長であるウエン氏に心より感謝しております。また本研究の調査に当たってインタビューや聞き取り調査に協力していただいたオンニュート旗ウラーンムチルの隊員の方々に感謝を申し上げます。

引用文献

【日本語】

藤澤忠編1938『満洲映画』（満洲映画協会）第2巻8号,第2巻10号, 第12巻11号

鯉渕信一1992『騎馬民族の心』NHKブックス
寵涛2014「新中国映画、新中国文芸における「満映」の影響：朱文順、賈作光、王啓民を中心に」北海道大学. 博士(文学) 甲第11483号
黄文雄2013『真実の中国史1949-2013』ビジネス社
紅桂蘭2013「中国内モンゴル自治区における民族文化活動に関する考察－通遼市のウランムチを事例にして－」『教育学論集』9：155-175
焦国標著，坂井臣之助訳2003『中央宣伝部を討伐せよ』草思社
貴志俊彦 2013『東アジア流行歌アワー』岩波書店
松浦恒雄2000a「宣伝の担い手－文工団とその役割」牧陽一，松浦恒雄，川田進編『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店，35-64
松浦恒雄2000b「翳りなき表彰－秧歌劇から革命模範劇へ」牧陽一，松浦恒雄，川田進編『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店，159-195
毛里和子1989a『中国とソ連』岩波書店
毛里和子1989b「中ソ対立の構造―対立の二〇年をどう評価するか」山極晃，毛里和子編『現代中国とソ連』日本国際問題研究所，114-139
ミンガド・ボラグ 2016『「スーホの白い馬」の真実』風響社
シンジルト2010「オラーンムチル現象に見る内モンゴル・インパクト」小長谷有紀，川口幸大，長沼さやか編『中国における社会主義的近代化－宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版，185-217
T・アルタンバガナ2017「文化資源としてのモンゴル人の文芸と中国の宣伝政策－内モンゴル自治区の歌舞団体の演芸作品を中心に－」『ユーラシア言語文化論集』19：111-153
T・アルタンバガナ2019「文化パフォーマンスとしてのモンゴル人の歌舞団－シリンゴル盟スニド右旗のウラーンムチル歌舞団を事例に－」T・アルタンバガナ，サランゴワ，ウリジャ，チョロモン編『モンゴル文化研究』（日本モンゴル文化学会）, 1:2

【中国語】

巴義爾 2001『蒙古寫意-當代人物卷二』民族出版社
陳破空2016『傾斜的天安門』台灣博大出版社
達・阿垃坦巴干，朱嘉庚編 2007『民族文化品牌鳥蘭牧騎賛』内蒙古自治区鳥蘭牧騎学会
達・阿垃坦巴干，朱嘉庚，洪涛編 2017『鳥蘭牧騎発展史』内蒙古自治区芸術研究院
紀蘭慰，邱久栄編 1998『中国少数民族舞踏史』中央民族大学出版社
金秋，張莉，寵雅文編 2015『新疆地域少数民族舞和内蒙古地区少数民族民間舞』藍天出版社
劉増軍，張仲仁編 2012『翁牛特旗鳥蘭牧騎志』内蒙古文化出版社
内蒙古自治区文化庁編 1997『鳥蘭牧騎之路-記念鳥蘭牧騎建立四十周年 1957-1997』内蒙古人民出版社

内蒙古自治区文化局編 1965『鳥蘭牧騎之歌』音楽出版社出版
斉・宝力高 2001『馬頭琴与我』内蒙古人民出版社
王慧琴，刑野編 2018『鳥蘭牧騎精神』方志出版社
王保士編訳 2000『前蘇連文化芸術辞典』長江文芸出版社
翁牛特旗志編委員会編1993『翁牛特旗志』内蒙古人民出版社
鳥国政編 2002『芸苑軽騎』内蒙古人民出版社
于智，赫佳音編 1997『草原金曲』遠方出版社
音楽出版社編 1965『冼星海歌曲選』音楽出版社
朱嘉庚，吉日嘎垃編 2018『鳥蘭牧騎回想録』内蒙古人民出版社
趙林平編 2014『当代草原芸術年譜・舞踏巻』内蒙古大学出版社
中国民族民間舞踏集成編集部 1994『中国民族民間舞踏集成・内蒙古巻』中国 ISBN 中心出版
中国民族民間文芸研究会編 1960『内蒙古歌謡』人民文学出版社